関東地方における弥生時代中期前半の地域相

渡　辺　修　一

目　　次

Ⅰ．問題の所在……115

Ⅱ．弥生前期段階の関東地方の概観……116

Ⅲ．弥生中期前半の土器群……118

Ⅳ．弥生中期前半の地域相……131

跋　　語……132

Ⅰ．問題の所在

関東地方における初期弥生文化の研究は近年大きく前進したかに見える。その背後には、まず第一に新資料の追加があり、そしてより大きな役割を果たしているものとして各地の研究者達が互いの連絡を密にし、それぞれの成果を検討し合うという姿勢の浸透がある。最近行われた二度のシンポジウムにおける成果(註1)は確かに注目すべきものを生んだ。しかしまた、多くの研究者が実感していることであろうが、なお重要な課題が残されていることも確かであろう。敢えて言えば、第一に関東地方において研究が進展したのは主として西関東であって、東関東、殊に房総半島を中心とする関東東南部が依然として空白であるという著しい地域的偏差が存在すること。そして第二には、初期弥生文化の研究は即ち初期弥生土器の研究であって、土器以外の諸相が何ら明らかになっていないことである。後者の問題は、該期の良好な生活址や生産址の調査例に恵まれないことが最大の障害であり、現状では如何ともし難く、重大な課題でありながら今後に送らざるを得ない。また前者の問題については荒海式土器と須和田式土器を繋ぐもの、つまり須和田式土器の生成過程が未だ明らかにされないことに最大の原因があろう。

所謂須和田式土器の研究は、行田市池上遺跡の調査(註2)と相前後するかのように活発となり、特にその細分が議論されるようになった。最近の須和田式土器の系統性や細分を扱った論考は、杉原荘介、関義則、石川均、田部井功、青木幸一らによって著されているが、そこには二つの方向性を見出すことができる。

主に文様要素によって土器群の分類、序列化を試みたのは杉原、石川、青木の三者である。杉原荘介は佐倉市岩名天神前遺跡及び佐野市出流原遺跡の調査を過て、須和田式土器をA類、B類の二者に分類した。その基準は三角連繋文、菱形連繋文であり、荒海式土器に見られるそれらの原形に近い文様を持つものをA類、それらのモチーフが崩れ、刺突文を多用するものなどをB類とし、A類からB類への変遷を考えた(註3)。また石川均は、栃木県粟野町戸木内遺跡の報文中で、須和田式土器の三角文、菱形文、弧文等の多様な文様要素それぞれを分析して須和田式土器の3段階（可能性として5段階）の変遷を考えている(註4)。さらに青木幸一は出流原遺跡出土土器をやはり文様要素の組合せによってⅠ類～Ⅳ類（それぞれはさらに細別される）に分類し、総体としてⅠ類～Ⅳ類への時間的推移があるとする(註5)。これらの三者の見解はそれぞれ一見論理的に見える。しかし例えば、杉原がA類、B類としたものが同一墓坑内で共存することについては充分な説明がなされていない。資料の一括性や地域性を無視した結果である。その点では一遺跡を扱った青木の詳密な分析の方がはるかに説得力を持つし、一括性もある程度考慮されてはいるが、結果としてはⅠ類に対比される土器とⅢ類に対比される土器が実は同一墓坑出土であるという矛盾（一部であるが）が露呈している。石川の場合は個々の文様要素を分解

して対比しており、土器群総体がいかなる変遷を辿るのかという視点が見られない。須和田式土器のように多様な文様モチーフと複雑な文様構成を持ち、土器毎の個性の強い土器群を扱うにあたっては、文様に頼る分析では分類過剰になって問題をより複雑化させる恐れがあると言えるかも知れない。

一方、深谷市上敷免遺跡出土土器を用いた関義則の方法は土器群の地域性を前面に推し出した点を特徴とすることができる。関は従来須和田式土器とされていた土器群を、条痕施文を主体とする平沢型土器群（上敷免、秦野市平沢北開戸）と出流原型土器群に大きく二分した。うち平沢型土器群については「広義の条痕文系土器群」と措定し、同じ条痕文系土器群でも岩櫃山式土器とは系譜の異なるものとしてその初現を畿内第II様式併行期に置いて、両土器群の展開を三段階に分けて考えた。また特に平沢型土器群が主体的分布域の狭さにもかかわらず、客体的には非常に広範囲に分布することから、その存在意義を「文化事象伝播の担い手」として位置づけている。(註6) 関の論考は、須和田式土器という複雑な様相を呈する土器群の中から明確な系統性を抽出し得たところに画期的な意義があり、それらの編年細分について分析が尽されていないものの、非常に高く評価されるべき見解と考えられる。また従来とかく混乱を内包してきた「須和田式土器」なる概念は今後使用しない方向で検討すべきであるという提言も傾聴に価すると言える。なおその後、田部井功が須和田式土器の器形、文様の分析から、関の見解を追認する結果を得ている。(註7)

弥生中期前半の土器研究も、いま見たような現状からすればその整理が始まったばかりと言える。筆者は関義則の論考を高く評価したが、そこでも「出流原型土器群」の初現形態は未明であり、今後東関東でその存在が確認されるであろうとしている。良好な資料の欠如は大きな障害ではあるが、上記に挙げた各氏の論考の中であまり検討の対象の中心に置かれなかった南関東も含め、「須和田式土器」とその周辺の資料を各地域間の対比という視座から整理しておくことも無意味ではないだろう。小稿はあくまで関東東南部における弥生土器成立期を明らかにするための準備作業である。

II．弥生前期段階の関東地方の概観

冒頭にも触れたが、前期に相当する弥生土器は現在のところ西関東に集中している。関東西北部では沖II、上久保、如来堂C、四十坂の各遺跡が代表的な遺跡として挙げられる。総体的な傾向として条痕文土器の極めて強い影響がある。

藤岡市沖II遺跡(註8)は自然堤防上に立地する墓坑群と包含層であるが、最も豊富な資料を出土している。若干の時期幅を持つが、古相を示すものは口縁直下に突帯を持ち長胴の在地化した条

痕文壺と、この地域特有の三角連繋文を中心とする沈線文様を頸部に持つ甕が中心となり、それに浅鉢等が附随するのが基本組成である。倉淵村上久保遺跡(註9)では三角連繋文甕は沖IIに共通するが、壺には水神平式に比定される東海系のものが見られ、また櫛歯状条痕を全面に施す甕も見られる。美里町如来堂C遺跡(註10)は墓址を伴わない生活址（包含層）であり、土器の出土状況から報告者はA～D地点の4単位を認めている。その土器群は距離としては沖II遺跡に比較的近い関係にありながら、様相はかなり異なる。報文中で組成比率が計算されているが、条痕を施すものを主体とした甕、深鉢が70％を超えており、浅鉢が18％、それに対して壺は5％に過ぎない。つまり、圧倒的優位にある甕、深鉢に浅鉢が加わって組成の主体をなしている構造が認められる。沖IIで主体をなす「在地型突帯文壺」と三角連繋文甕はあくまで客体である。なお、渋川市南大塚遺跡(註11)では東海系の条痕文土器、在地型壺と共に如来堂Cで主体を占める甕が出土しているとのことである。以上の各遺跡は土器の伴出関係から時期的には差がなく、水神平式併行期と見做し得るから、関東西北部における弥生前期末の状況を次のようにまとめることができる。

東海系の条痕文土器が直接的に関与する遺跡は、現在のところ利根川水系上流域の山間部の河川沿いにしか存在しない。しかしこれらは再葬墓出土の土器群であり、生活址の実態はなお明らかでない。沖積地に進出した沖II遺跡では東海系条痕文土器の強い影響下に成立した土器群が主体を占めるが、その当初の段階ではより東方に位置する如来堂C遺跡では弥生土器の組成が甚だ未完成である。如来堂Cと同じ小山川流域に所在する四十坂遺跡はやや遅れて成立するらしいが、在地型突帯文壺など沖IIの組成に近い内容を持っているようである。とすれば、弥生的な土器組成の完成には如来堂Cの土器群の自律的な変化ではなく、沖IIなどの土器群の関与があったことになる。そして北関東における在地型突帯文壺の主体的な分布は四十坂あたりを東限とするらしい。この周辺の事情は水神平式土器の強い影響力を蒙った地域の外縁部としての複雑な状況を顕現したものと解することが可能であろう。

関東西南部における弥生前期に対比される土器群は、遺跡数はあるが断片的な資料が多い。中では秦野市平沢同明遺跡(註12)と日野市椙山神社北遺跡(註13)がややまとまりを見せる。しかし平沢同明遺跡では報告資料の時期幅があって一時期の組成を抽出するには到らない。水神平式併行と思われる在地の突帯を持つ壺がかなり含まれる。椙山神社北の資料は時期的にはより限定されているようであるが確定的ではない。やはり在地型突帯文壺が相当量含まれている。他に甕、深鉢、浅鉢があり、いずれも縄文土器の伝統の根強い内容を持っている。甕、深鉢には細密条痕あるいは撚糸文を施しており、特に撚糸文に特徴を見ることができる。これらの土器群は東海系条痕文土器の影響下に成立するものであろうが、関東西北部の土器群と比べると在地型突帯文壺の組成への参画という点で共通するものの甕、深鉢において大きく異なり、むしろ山梨県

方面との強い連関性を有している[註14]と言える。分布域としては東京、神奈川の西部の丘陵地帯に限られ、東京湾岸における該期の姿相は全く不明である。

房総半島においては、現在のところ3遺跡から東海系条痕文土器が出土している。成田市荒海貝塚[註15]、四街道市御山遺跡[註16]、東金市道庭遺跡[註17]である。荒海貝塚のものは丸子式の壺口縁部であるが、それにいかなる土器群が伴うかは明らかではない。

四街道市御山遺跡は浮線網状文の新しい段階から所謂荒海式期の包含層で、住居址を含む4単位以上の生活址が認められる。大きくは2時期に分かれるようで、条痕文土器は新しい一群の中に検出されている。破片数は多いが細片ばかりで殆ど接合せず、器形も明確ではないが、明らかに東海系の搬入品で羽状条痕が見られない。断言はできないが樫王式土器に比定される可能性がある。それに伴う土器群は荒海式の古い段階のものと思われるが、御山遺跡における前段階の一群との比較では浅鉢の組成比率がやや低下しているようである。これは浮線文を施文する浅鉢が組成主体から欠落していく結果であると考えられ、興味深い現象と言える。一方、東金市道庭遺跡では、明確な搬入品の水神平式の壺口縁部が出土している。それに伴うと思われる土器は量的には多くないが、いずれも甕及び深鉢で菱形連繋文の一単位の上下幅が狭くなり多段化したものが多い。地文に細密条痕を施すものとそうでないものがある。この一群は荒海貝塚には主体でなく、殿内ＢＶ式土器[註18]とされたものとの共通性があって、荒海式の範疇に入れるとすればその最も新しい段階とすることができる。

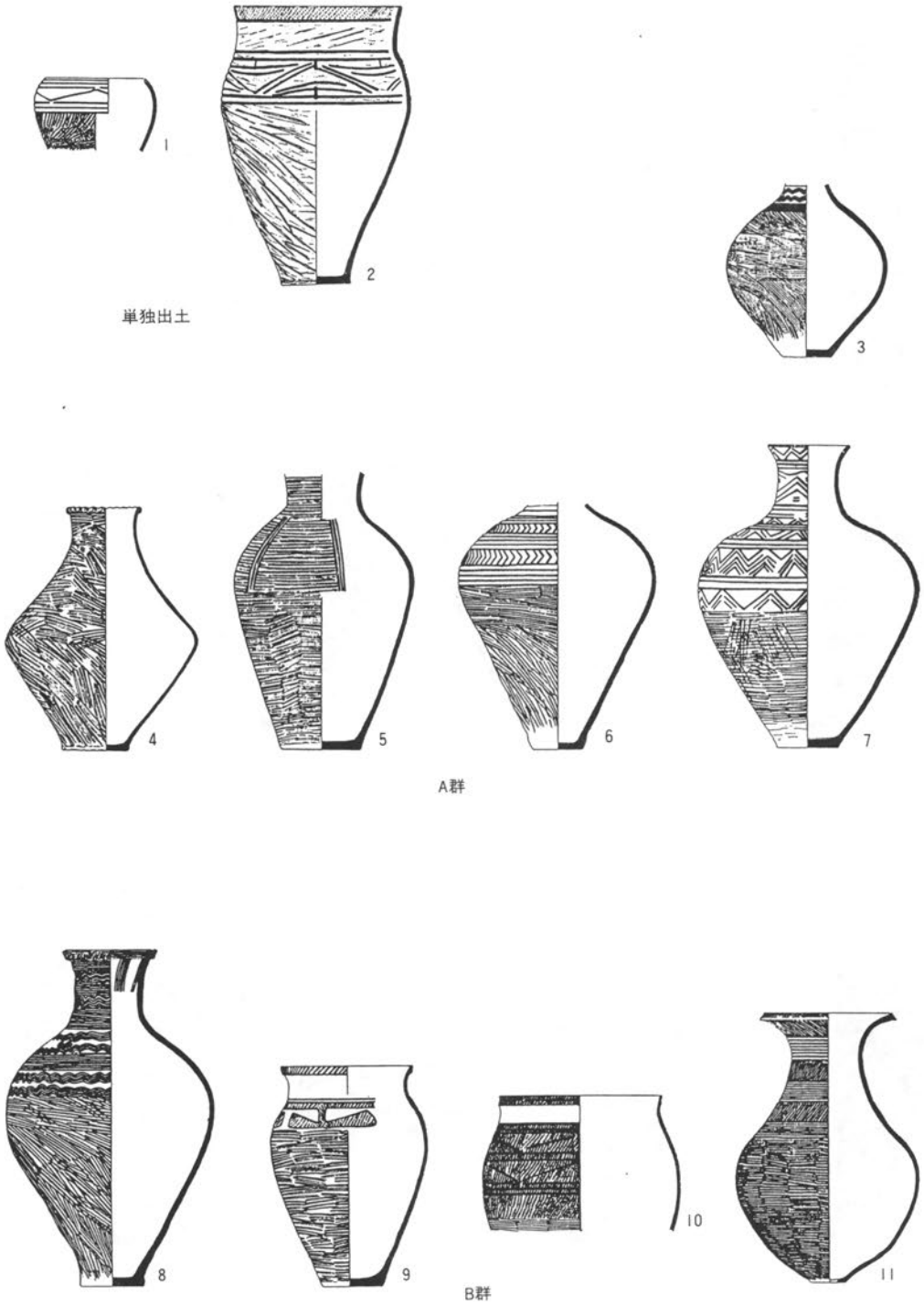
最近になって荒海式土器の細分が議論されるようになったが[註19]、一括性を持つ資料に乏しいため、充分な成果を見るには到っていない。しかし3段階程度の変遷を辿ったであろうことが予想され、それは縄文土器組成の解体過程として把握されるのではないかと考えられる。そこに条痕文土器の果した影響は大きいであろうが、荒海式土器段階においては壺の主体的な参画はなく、弥生土器として成立するまでには到達し得なかったのではないかと思われる。

III. 弥生中期前半の土器群

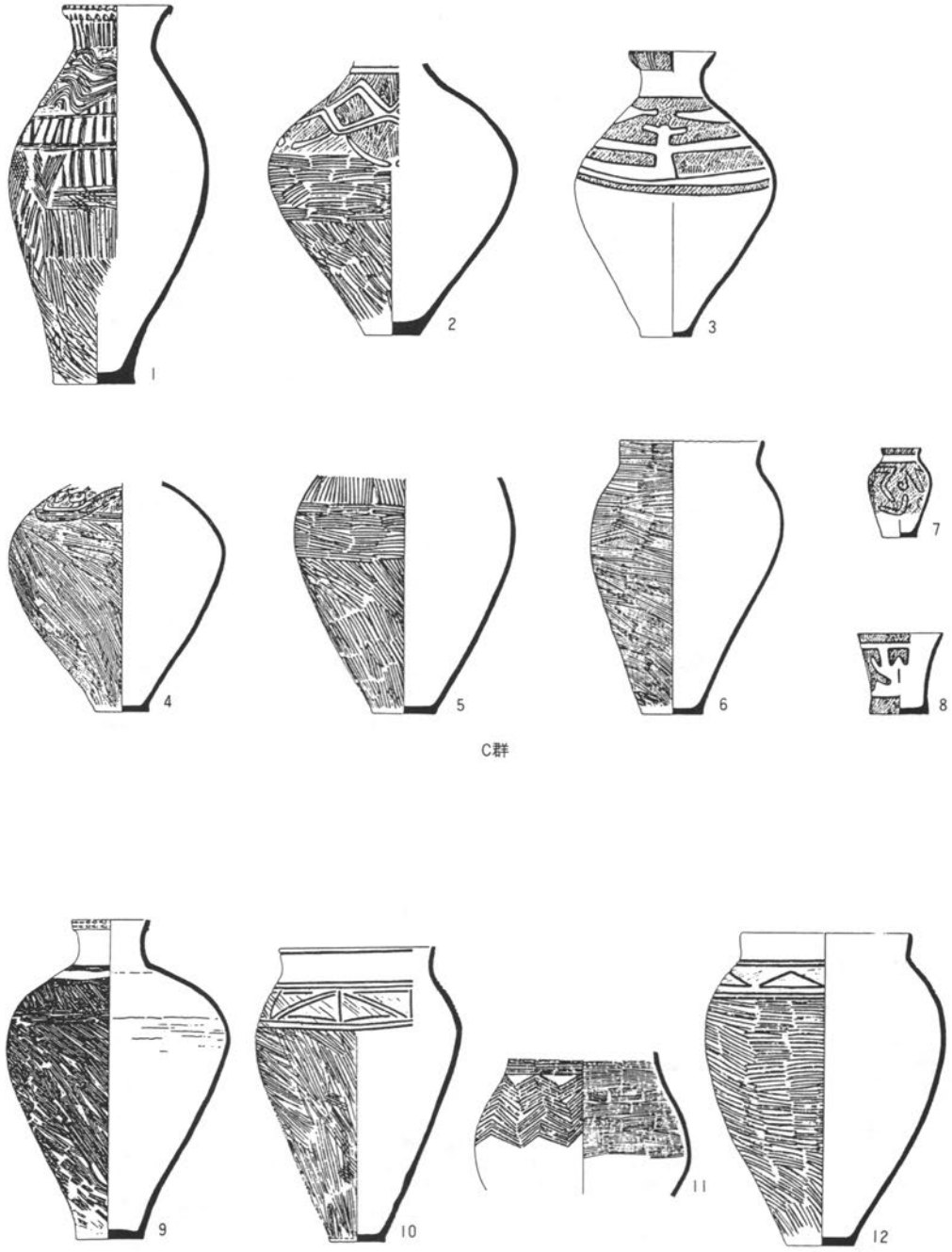
従来、弥生中期初頭の土器群としては岩櫃山式土器、堂山式土器の二者があり、その評価は定着してきた。それに対して須和田式土器（あるいは野沢Ｉ式）は中期初頭に位置づける見解と中期中葉に位置づける見解があったことは周知の通りである。そこには土器群の系譜や分布域が関係する。本節ではそれらの土器群を地域毎に概観し、編年上の問題も含めて検討してみたい。

(1) 吾妻町岩櫃山遺跡[註20]（第1図、第2図）

再葬墓群でＡ～Ｃの3群及び単独で2個体が出土した。これらの土器群が弥生中期初頭とさ



第１図　吾妻町岩櫃山遺跡出土土器(1)



第２図　吾妻町岩櫃山遺跡出土土器(2)

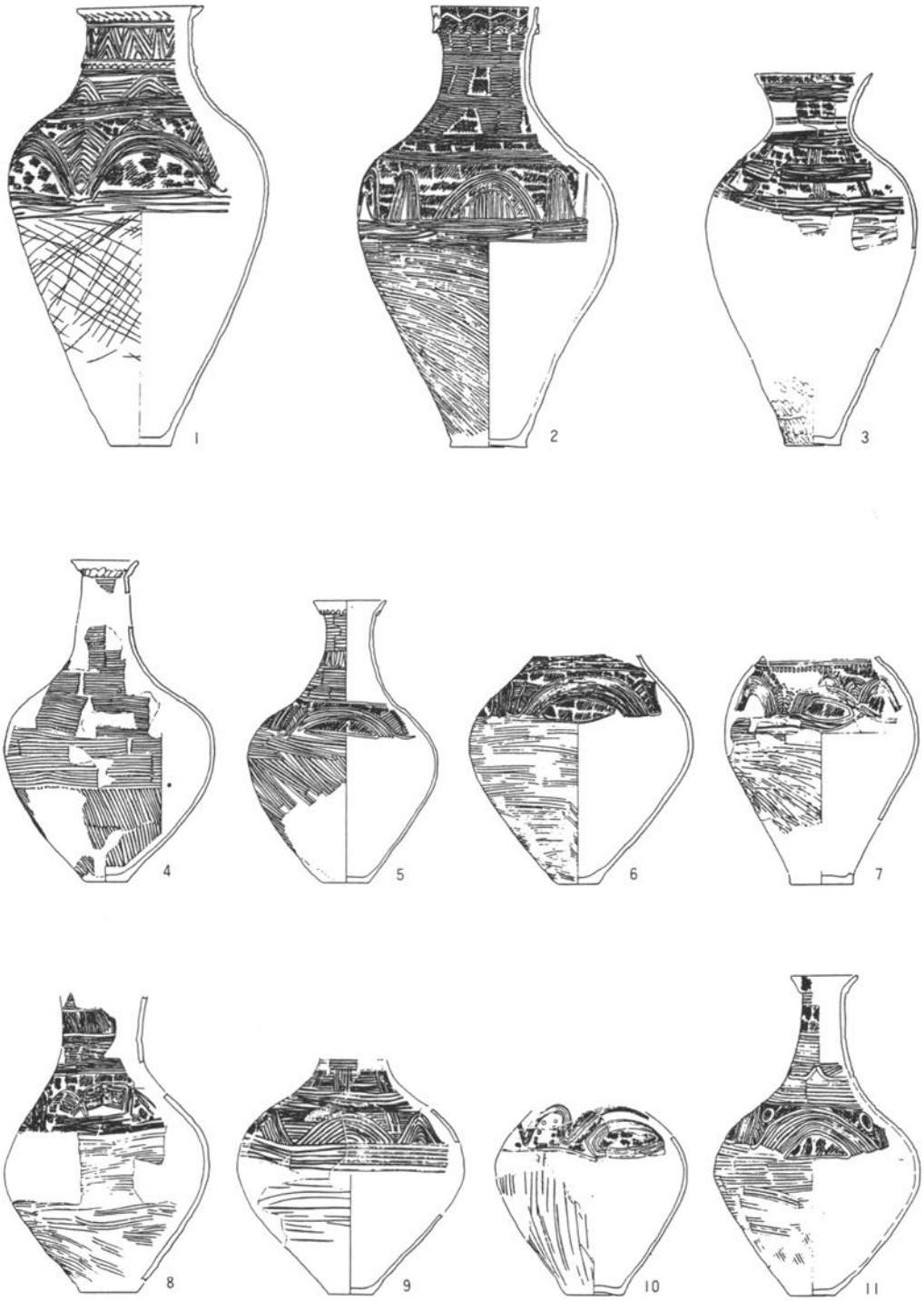
れた根拠の一つにB群中の東海系土器（第1図—11）があり、これは丸子式段階に比定される。また他の土器も条痕施文が主体的である。器形としては、壺が胴部下半が直線的に立ち上がり肩部が張るものが多く、前段階からの系譜で理解される。特に折返し口縁を持つもの（第1図—8、第2図—1）はその下端の刻目をとってみても前段階の在地型突帯文壺を継承するものであることがわかる。甕は三角連繋文を継承するものと条痕施文の二者が存在する。但し第2図の下段のものは段階差があって時期的に溯る。鈴木正博はこれらを岩櫃山1式（B群）と2式（A・C群）に分離したが[註21]、それを積極的に肯定する程の材料はないと考えられる。さてこれらに類似する土器群の分布域は、他にこれ程豊富な資料を出土した遺跡はないが群馬県の過半を覆う。しかし、地理的には広義の利根川水系上流域に限られる。

(2) 深谷市上敷免遺跡[註22]（第3図、第4図）

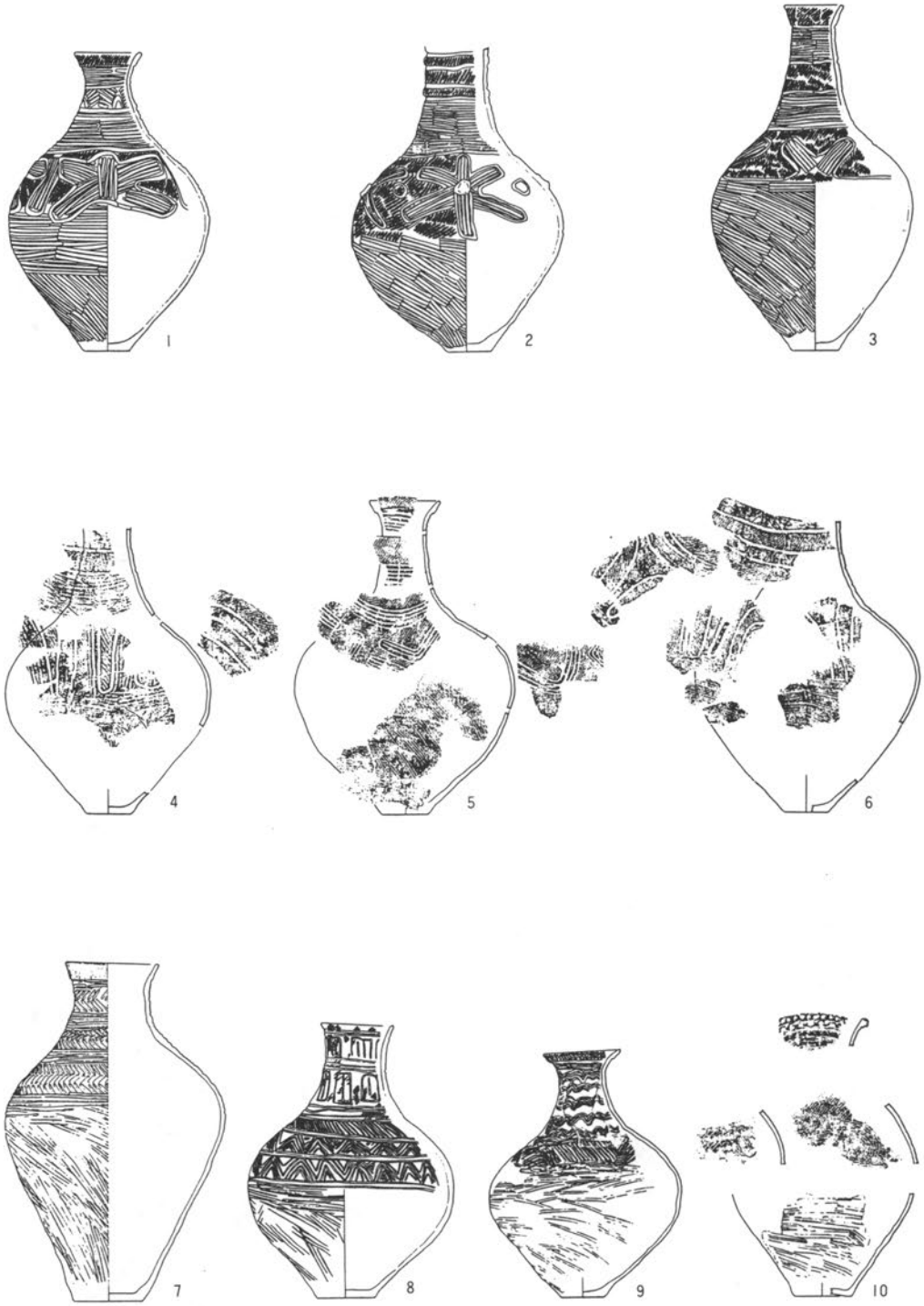
再葬墓群である。利根川水系が中流域にかかる辺りの沖積地に所在する。多数の土器が出土しており、その約半数を掲載した。詳しい分析は関義則の論考に譲り、総体的な傾向性を検討する。器種は殆ど壺のみであるが、明らかに二種に分けられることは関が指摘した通りである。まず注目したいのは長胴で肩部が張る器形（第3図—1～3）である。特に2は折返し口縁を持ちその下端に刻目を有する点で岩櫃山遺跡の一部に共通し、また弥生前期段階の突帯文壺に繋がる。しかしより主体的に存在するのは胴部に丸味を帯び頸部が細長い壺である。全体に条痕施文が支配的で地文の縄文が一部見える。文様の上で特徴的なのは文様帯区分が明確であることと、弧文モチーフ及び縦位羽状文の施文率が高いことである。文様帯区分については丸子式土器の一部に共通しているが、長胴の器形ではあまり明瞭でなく、細頸の器形の方により厳密に守られている。従って細頸の器形は東海系の系譜を持つことになる。典型例を挙げれば第3図—5になろうか。この器形には他の文様モチーフを持つものも存在するが、目立つものとしては菱形連繋文から変化したと考えられる例（第4図—1～3）がある。折返し口縁を持つことでは長胴の器形に共通するが、原形に近いと思われる文様構成を持つ第3図—5が下端に刻目を有するのに対し、第4図—1、3では折返し部が弱く刻目を持たないという特徴がある。甕形土器については上敷面では一個体出土しているが、折返し口縁を持ち胴部は条痕施文、口縁部のみ縄文地に山形文というものである。これらのような土器群を主体的に持つ遺跡は北関東には他に殆ど存在しない。唯一の例外は神川村前組羽根倉遺跡[註23]である。

(3) 秦野市平沢北開戸遺跡[註24]（第5図）

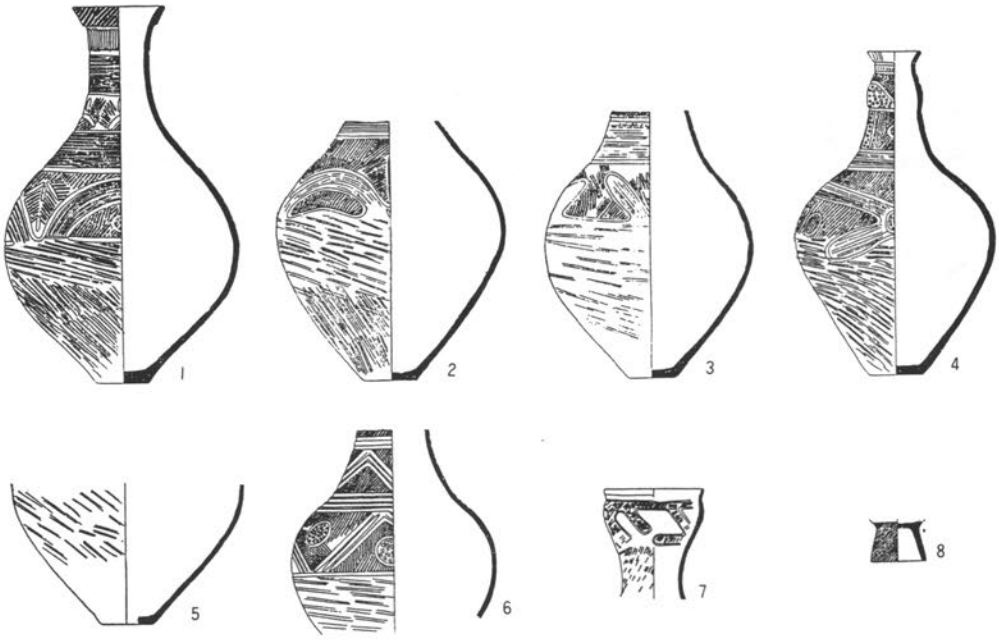
前出の平沢同明遺跡などと共に平沢遺跡群を構成する。土器群の内容は上敷面遺跡に非常に近似する。特に1～3の類似性は驚く程である。しかし4と6には異なった要素が見られる。4は口縁部から頸部の形態が規範を外れ、円形文を持つこと、刺突文を有することなどが特徴となる。また6は文様帯区分は基本的に同じであるが、三角連繋文を用い4と同じく刺突充塡



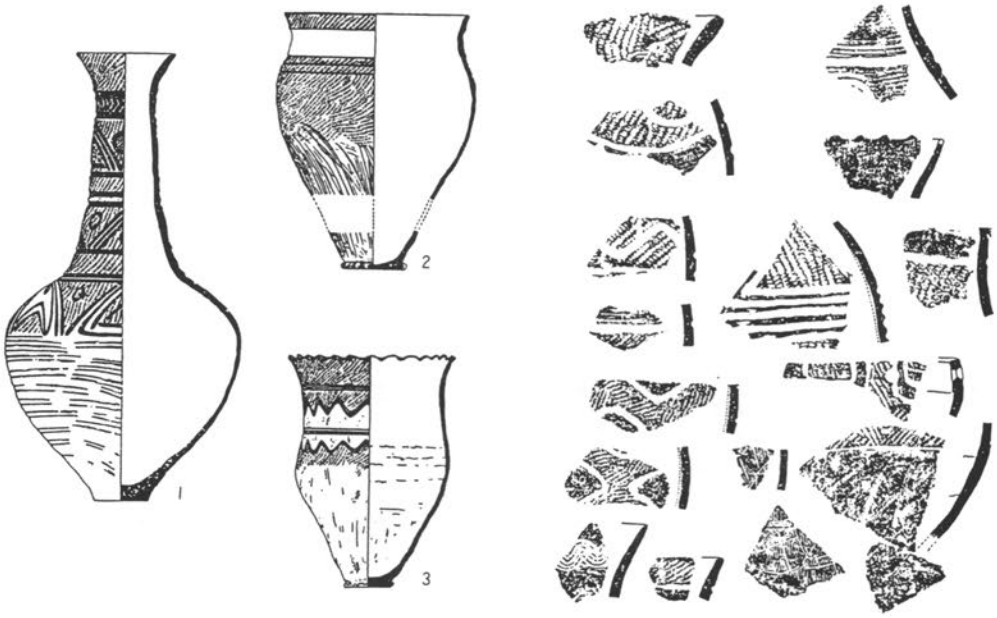
第3図　深谷市上敷免遺跡出土土器(1)



第4図　深谷市上敷免遺跡出土土器(2)



第5図　泰野市平沢北開戸遺跡出土土器



第6図　三浦市遊ヶ崎遺跡出土土器

の円形文を持つ。これらにより東方の文様要素の導入を見ることができる。この地域は堂山式土器の分布圏の東縁に相当する。堂山式土器の壺は丸子式土器と全く同一と言ってよい内容を持っており、平沢同明遺跡でも検出されている。このような地に上敷面遺跡と同じ内容の土器群が成立することは注目に価する。

(4) 三浦市遊ケ崎遺跡[註25]（第6図）

同じ神奈川県でも東京湾側に位置するこの遺跡では平沢北開戸とは全く異る土器群を出土している。条痕による文様はなく、またモチーフも三角連繋文を多用する。三角連繋文は沈線によって独立する三角形を描く手法を取る。1では他に円形文を組み合わせている。ここでは甕形土器も出土しているが、それらもまた縄文地を基調とするものである。

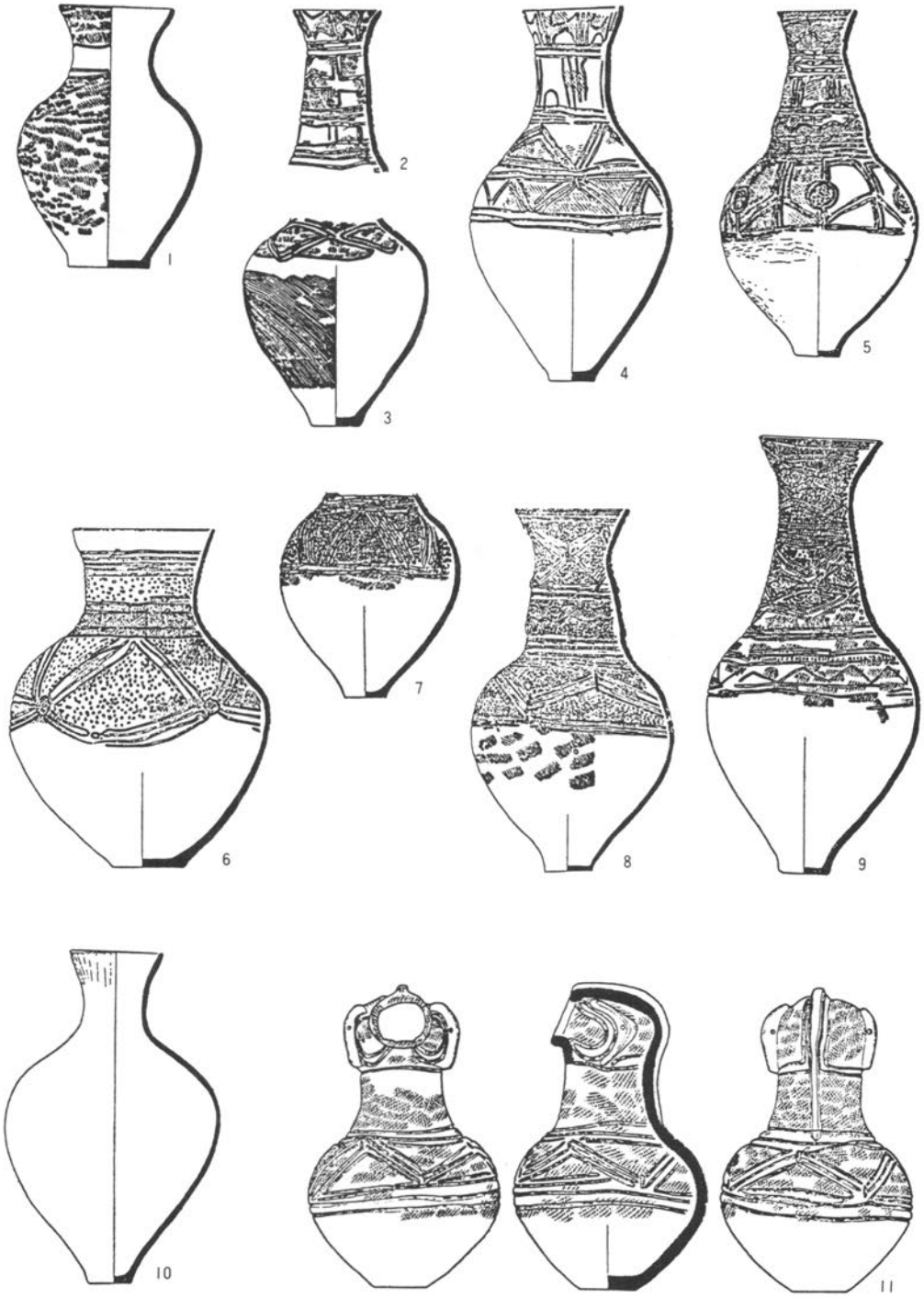
(5) 佐野市出流原遺跡[註26]（第7図）

再葬墓群で著名な遺跡である。きわめて多量の土器を出土しており、うち11号墓坑出土土器を選んで図示する。出流原遺跡は当然若干の時期幅を持つが、図示した資料で全体の土器相を代表させた。同じ北関東にありながら上敷免遺跡とは非常に対照的な土器群である。第一に条痕を用いることがない。第二に基本的な文様モチーフは三角連繋文、菱形連繋文で、かなり強固に守り通している。三角連繋文は独立した重三角文の組み合わせを用いることが少ない。第三に刺突文を多用する、などである。ただ刺突文の使用に関しては墓坑間に差があり、その使用の多寡によって段階差の一つの表われであるとするのは妥当かも知れない。なお器形の上では、頸部がやや太く、直線的かやや膨らむ傾向がある。三角連繋文、菱形連繋文を多用する土器群の分布は広い。しかし器形の特徴等も加味して見ると、出流原に代表される土器群は利根川中流域に分布の中心を持つと言えそうであり、上敷免遺跡に比較的近い妻沼町飯塚遺跡[註27]にも存在している。

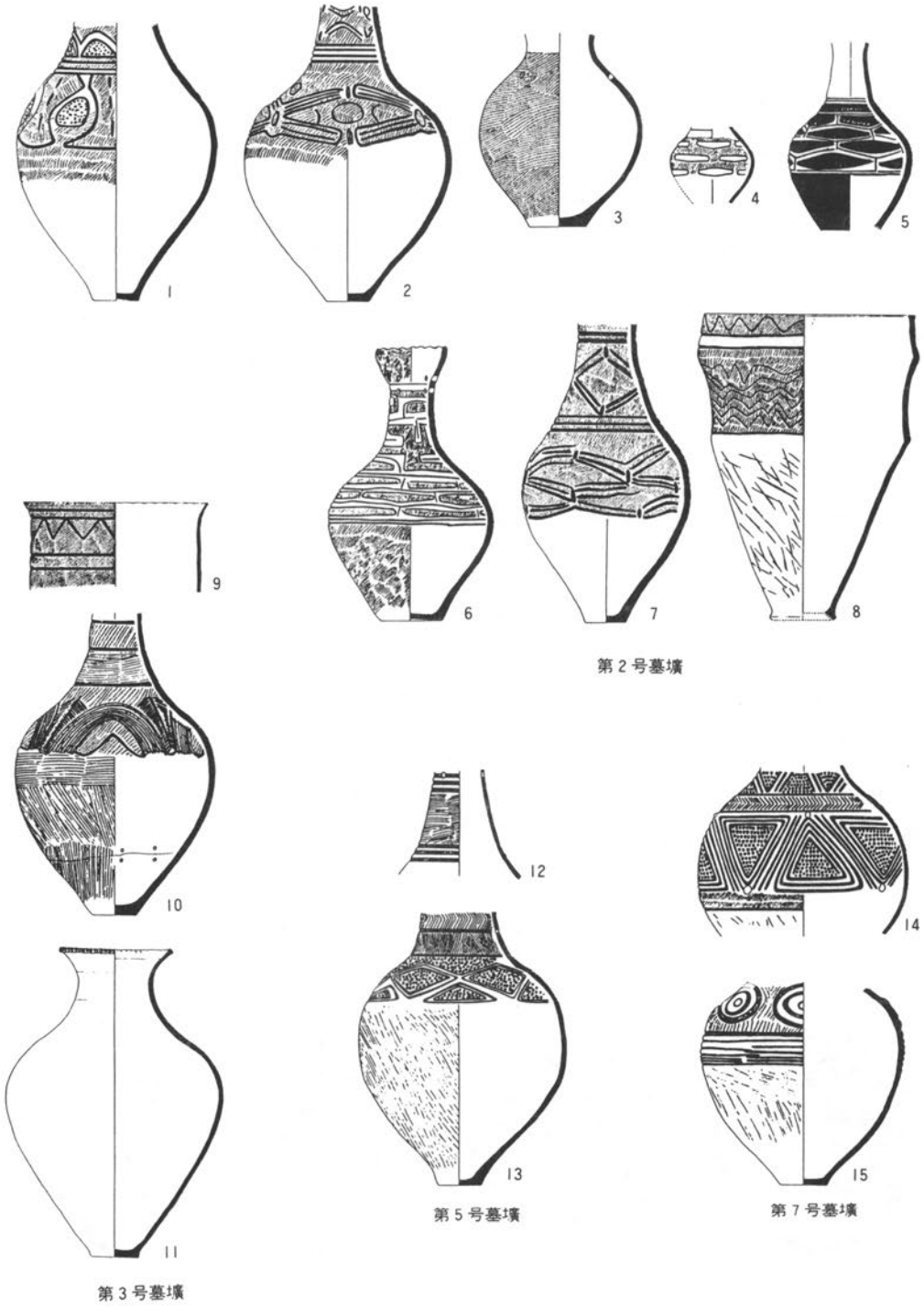
(6) 佐倉市岩名天神前遺跡[註28]（第8図）

やはり再葬墓群である。その中から4基の墓坑の資料を図示した。一見して言えることは、墓坑毎の個性が強く、全体として多様な文様要素の融合体となっていることである。それぞれ北関東との対比で示せば、第3号墓坑は10を含むことから西関東との関連が強く、また第2号墓坑出土土器は例えば1は下館市女方遺跡[註29]に近いものがあるし、6は出流原遺跡で全く同一と言ってよいものが存在するから、東へ寄った地域との関連が強い。第5号墓坑及び第7号墓坑については、13と14の菱形連繋文と三角連繋文が独立した重区画文の複合体となっている点が出流原の系譜とは異なり、熊谷市三ケ尻上古遺跡[註30]との近似性を指摘できる。この現象をいかに理解すべきであろうか。

現在筆者は四街道市池花南遺跡[註31]を調査中であるが、試掘段階で須和田式土器を含む包含層を確認した。本調査は1986年度に行われるため断定的なことは言えないが、岩名天神前とは若干



第７図　佐野市出流原遺跡第11号墓壙出土土器



第8図　佐倉市岩名天神前遺跡出土土器

様相の異なる土器群が存在するようである。壺は縄文を地文として沈線のみで文様を描くものが多く、その文様は原形に近い三角連繋文、菱形連繋文や連弧文などがあり、刺突充塡の三角連繋文も伴う。胴部下位は条痕（貝殻腹縁及び茎束条痕）を用いる。甕は口縁が外反し肩部が膨らむ器形で口端に刻目を持つ。地文のないものと、無節縄文、単節縄文、撚糸文を地文とするものとがあり、沈線でやや乱雑な文様を描くものなどが見られる。また甕の中には殿内ＢＶ式Ｆ類に似た刺突を有するものや、殿内晩期粗製土器に近似するものも存在する。これらを全体として古相を示す例と理解しうるのか、遺跡の存続時期に幅があるのかは本調査時の課題となるが、距離的に近い岩名天神前に比べて壺形土器は単純な構造を示し、よりこの地域における純粋なあり方を示す資料となることも予想される。

ここで検討した土器群のうち明確に言えることは、条痕文土器の系統の土器群と須和田式土器の分布域がほぼ完全に分離されることである。従って両者を単純に前後関係で割り切ることはできない。換言すれば須和田式土器の初現は弥生中期初頭にある可能性がある。須和田式土器の時間的位置を確定することは今日でも困難を伴うが、ここでまず若干の検討を行っておきたい。

従来須和田式土器とされてきた土器中で広範に移動する特質を持つものとして関義則が「平沢型土器群」を挙げたことは先に述べた。それらの一部を第９図に示した。この一群の土器を主体的に持つ２遺跡のうち、初現形態（に近いもの）が上敷免遺跡に存在することは自明であるが、第９図の４個体のうちその原型に近似する例は銭宮(註32)及び女方に見られる。それらに対して朝日(註33)例は、基本形は共通するものの羽状文が消失し、かわって円形文と刺突充塡が付加されており、複数系統の要素が融合していることになる。ここで原型との間に若干の時間差を想定することができる。朝日例は貝田町式古段階に伴うとされているが、そうすると上敷免遺跡の土器群は、より古い系譜を持つ器形の存在等を考えればその初源を中期初頭まで溯らせ得る可能性がある。

第９図　「平沢型土器群」の広がり

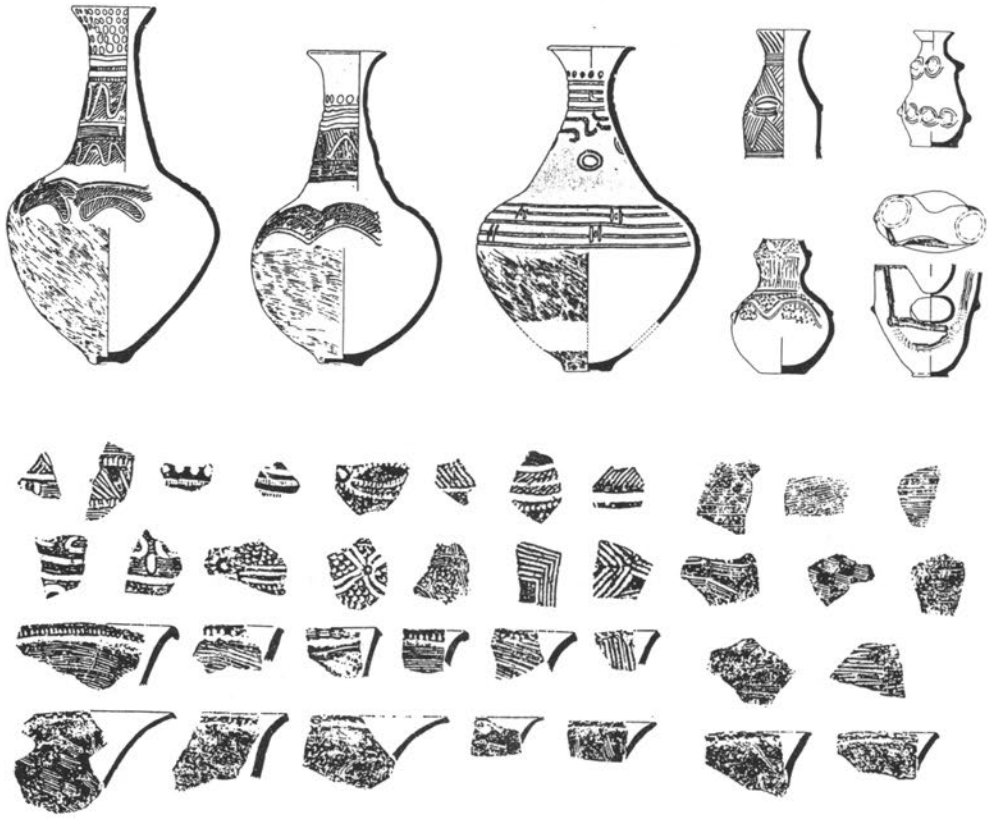
第10図　南信濃村尾之島館遺跡出土土器

次に中部高地の土器群を若干例参考にしたい。東西の要素が共に存在し、時間的な対比を行う上での好資料だからである。第10～12図は下伊那地方の土器群である。ここで図示した土器群の中では最も古相を示すのが南信濃村尾之島館遺跡出土土器(註34)（第10図）であり、ほぼ丸子式土器に対比される。ここで注視したいのは弧文を持つ3であろう。3は3号住出土、1、2は2号住の出土であり、別遺構のものであるが、2号住においても3に類似した資料を見出すことができる。これによって弧文が丸子－庄之畑式段階に存在した可能性を認めることができる。第11図は飯田市寺所遺跡出土土器(註35)、第12図は喬木村阿島遺跡出土土器(註36)である。これらによって寺所式、阿島式が設定されている。天竜川を挟んで対峙する両遺跡の土器群の比較では、寺所遺跡が先行すると考えられる。阿島式土器は嶺田式土器、瓜郷式土器と接点を持つため、寺所式土器は従来中期初頭に置かれてきた。とすれば中期初頭段階ですでに刺突文が導入されていることになる。確かに両遺跡が位置する下伊那北部では丸子一庄之畑式に対比される土器群は今のところ存在しないが、細部の特徴から中期初頭の条痕文土器群と同列に置くことはできず、ここでは阿島式土器成立直前段階としておきたい。

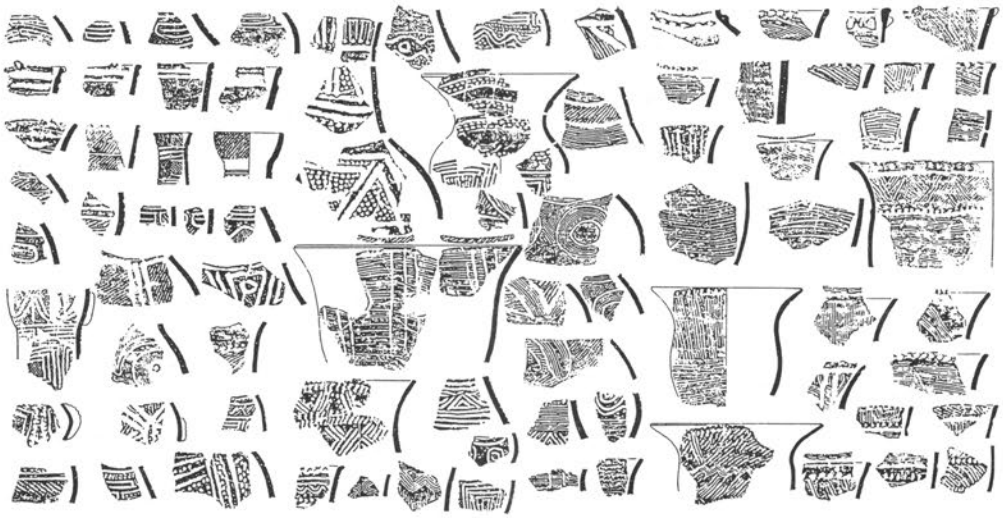
第13図は松本盆地に位置する明科町緑ケ丘遺跡(註37)の土器群であり、集石遺構とその周辺から集中的に出土している。この中で注目されるのは刺突充塡の三角連繋文を持つ、須和田式土器と言ってもよい壺形土器、及び円形文、弧文を持つ壺形土器である。後者に関連して美濃加茂市牧野小山遺跡(註38)の土器群が注視される。牧野小山遺跡の土器群は条痕文土器の中で櫛描文への傾斜が指向された状況を示しているが、緑ケ丘出土土器に対比される円形文や弧文を持つ土器はＹ３号住及びＹ10号住という比較的新しい要素が少ない資料中に存在する。特にＹ３号住では岩滑式の特徴とされる跳ね上げ文を施文する条痕文壺が明瞭に遺存する。そこでこれらの土器群に接点を持つ緑ケ丘遺跡を畿内第II様式併行期から第III様式併行期への過渡段階に位置づけることができる。そしてこの段階に刺突充塡の三角連繋文壺が流入しているから、関東地方において畿内第II様式併行期のうちに須和田式土器が成立している可能性が生じる訳である。なお

東方の要素が中部高地に流入してくる点に関連して想起すべきは、関義則が「メッセンジャー」と呼んだ「平沢型土器群」であろう。各地で見出される「平沢型土器群」は上敷免遺跡で定形化して以後のものであるが、関東地方の要素が西方に波及する時点を「平沢型土器群」が定形化し、「メッセンジャー」としての役割を発揮しだす（関の指摘が正しいとすれば）時点と重ね

第11図　飯田市寺所遺跡出土土器



第12図　喬木村阿島遺跡出土土器



第13図　明科町緑ヶ丘遺跡出土土器

ることはできないであろうか。それは即ち畿内第II様式併行期から第III様式併行期への過渡段階であり、寺所遺跡の土器群に刺突文が使用されるようになるのもこの段階と考えて矛盾はあるまい。

IV. 弥生中期前半の地域相

議論がやや飛躍してしまったが、最後に前節での検討を整理してまとめておきたい。

（1）弥生時代前期末頃において西部東海系の条痕文土器の流入を見、その強い影響を受けた土器群を生んだ関東北西部及び関東南西部の一部地域では、弥生中期初頭に至っても条痕文土器の系譜をひく土器群が支配的であった。そしてそれらの地域の外縁部に当たる狭い範囲の中では、中部高地を通じて西方と連関を持ちながら、弧文と縦位羽状文という独特の文様構成を有する土器群を形成する。それはまず北関東の上敷免遺跡で成立して、次段階では広範な移動を開始すると共に南関東の同様な位置にあった平沢北開戸遺跡の土器群を成立せしめる。その頃に菱形連繋文や三角連繋文が、かなりその形を変えながらこの土器群の中にも消化されていくらしい。

（2）利根川中流域から下流域右岸にかけての、弥生前期段階で弥生土器の成立に到達しなかった地域では、西方の土器の影響を受けながらも荒海式土器の文様モチーフを積極的にとり入れた土器群を形成する。その当初の様相は充分明らかになっていないが、それら須和田式土器と呼ばれてきた土器群がかなり強い地域色を持つことから見て、一個の土器群の波及ではなく、

相互に連関を有しつつ多元的に成立してきたことが推察される。

（3）利根川中流域は、やや頸部の太い器形を持ち、三角連繋文、菱形連繋文の原型を固守して刺突文を積極的に導入する出流原遺跡の土器群に代表される。しかしやや南よりの遺跡には、文様連結部の刺突がない重区画文化した三角連繋文、菱形連繋文を多用し、刺突を用いても区画内の充塡が主体である土器群が存在する。ただしそれらを厳密に地域区分することはできない。

（4）東京湾西岸側は刺突文の使用頻度が少なく、文様連結部に刺突を持つ三角連繋文、菱形連繋文も用いることがない。逆に重区画文を多用する。これは今回検討の対象としなかった相模湾岸西部以西との共通要素である。[註39] 重三角文の組み合わせによる三角連繋文については、かつて新島式土器と仮称された新島田原遺跡10群土器[註40]などもその源流の一つになる可能性がある。このことに関連して言えば、刺突充塡の三角文は決して後出の要素ではない。というのは、最近荒海式土器の中で刺突を充塡する三角連繋文が存在することが、先述の四街道市御山遺跡で確認されているのである。

（5）利根川下流域右岸の代表的遺跡として岩名天神前遺跡を挙げたが、この土器群は複数の互いに異なった要素を持つ土器群の複合体と見るべきである。そこからこの地域の独自性を抽出するのは困難ではある。とは言えそれは、須和田式土器に本来的に存在した地域性とそれら相互の積極的な交流とが、文様構成を多様化し複雑化させていった結果であり、逆にその点にこそこの遺跡の特質を見ることができるかもしれない。

以上見たことから、須和田式土器とされてきた一群のうち、関が提唱した「平沢型土器群」を除いても、さらに地域性を抽出することができるであろう。それは主として三角連繋文及び菱形連繋文に見ることができる。即ち、文様連結部に刺突（縦の短い沈線）を持つものは今のところ利根川水系にしか存在しないのに対し、重区画文化したそれらは南関東により多く分布する。それは同じ房総でも東京湾岸に位置する千葉市新田山遺跡の土器群[註41]と岩名天神前遺跡のそれを比較すれば、容易に理解される。刺突を充塡する三角連繋文の淵源は房総半島にある可能性があるが、利根川水系に沿ってその分布は延びている。これらの現象は、須和田式土器がそれぞれの地域の縄文晩期最終末の土器群をベースにして生成した、少なくともその蓋然性を高めるものと思われる。荒海式土器の分布域とその周辺の把握が今後なされなければならない。

ここでは、新しい段階の行田市池上遺跡の土器群を除き須和田式土器がその組成すら明確ではない現状から壺形土器しか扱えなかった。甕形土器等の掌握については今後に期待がかかる。

跋　語

小稿は関東地方の中でも弥生土器の成立期の事情が明確でない地域の姿相をより鮮明にする

ための準備作業として、特にそのような地域を中心に分布する須和田式土器の地域性を概観し、整理するのが目的であった。しかし大変雑駁な議論に終始してしまい、力量不足と努力不足が重なって筆者自身甚だ不本意な文章となってしまった。この問題に関しては今後も論究を重ねて行く所存である。御寛恕されたい。

さしあたって当面の課題を挙げるとすれば、各地域の土器群の展開を詳密に追求すること、そして晩期縄文土器の終末期の展開をより明確にすることであろう。これらの点については近く報告する機会があるかも知れない。その際には小稿の補足や訂正も含まれることになろう。

註

1）『第4回三県シンポジウム　東日本における黎明期の弥生土器』　北武蔵古代文化研究会・千曲川水系古代文化研究所・群馬県考古学談話会　1983

『昭和60年度秋期研究集会　〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題 ── 縄文から弥生へ ──』発表要旨，資料編Ⅰ　愛知考古学談話会　1985

2）中島　宏・他『池守・池上』　埼玉県教育委員会　1983

3）杉原荘介「須和田式土器の細分について」　わかしお1　1977

杉原荘介『栃木県出流原における弥生時代の再葬墓群』　明治大学考古学研究室　1981

4）石川　均・他『戸木内遺跡』　栃木県粟野町教育委員会　1985

5）青木幸一「須和田式土器における類型的把握 ── 栃木県出流原遺跡出土資料の検討 ──」日本考古学研究所集報Ⅷ　1986

6）関　義則「須和田式土器の再検討」　埼玉県立博物館紀要10　1983

7）田部井功「須和田式土器の一考察 ── 特に系譜の検討をふまえて ──」　古代80　1985

8）設楽博己「関東地方の〈条痕文系〉土器 ── 西部東海系条痕文土器を中心として ──」『〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題』資料編Ⅰ　1985

9）山崎義男「群馬県上久保弥生遺跡調査報告」　考古学雑誌44－3　1959

10）増田逸朗・他『甘粕山』　埼玉県教育委員会　1980

11）前掲8）

12）杉山博久・松浦宥一郎・設楽博己「秦野市平沢同明遺跡の調査」『第5回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』　1981

13）先崎忠衛・他『町田市椚山神社北遺跡』　町田市椚山神社北遺跡調査会　1981

14）椚山神社北の突帯文壺は山梨県柳坪遺跡A地区16号住にみられる壺などに極めて近似する。柳坪では甕・深鉢に有文のものはなく，殆どが細密条痕を施す。

蛭間真一「山梨県北巨摩地方の弥生時代初頭土器について」　信濃29－8　1977

15）前掲8）

16）1984，85年度　㈶千葉県文化財センター調査　資料実見

17）道庭遺跡調査会調査　資料実見

18）杉原荘介・他「茨城県殿内（浮島）における縄文・弥生両時代の遺跡」考古学集刊4－3　1969

19) 鈴木正博「「荒海」断想」　利根川１　1981
青木幸一「荒海式土器の再検討」　史館14，16　1983，1984
20) 杉原荘介「群馬県岩櫃山における弥生時代の墓址」　考古学集刊３－４　1967
21) 鈴木正博「「岩櫃山」之声」　利根川２　1981
22) 蛭間真一『上敷免遺跡』　深谷市教育委員会　1978
前掲６）
23) 前掲１）1983
24) 亀井正道「相模平沢出土の弥生式土器に就いて」　上代文化25　1955
25) 神沢勇一・浜田勘太「三浦市城ケ島出土の弥生式土器」『横須賀市博物館研究報告５』　1961
26) 前掲３）杉原　1981
27)『埼玉県土器集成４』　埼玉考古学会　1976
28) 杉原荘介・大塚初重『千葉県天神前における弥生時代中期の墓址群』　明治大学考古学研究室　1974
29) 田中国男『縄文式弥生式接触文化の研究』　1944
30) 前掲27)
31) 新発見。千葉県四街道市内黒田146所在。千代田遺跡群の臨接地。
32) 小林康男・他「下西条地域の考古学的調査」　平出遺跡考古博物館・歴史民俗資料館紀要１　1984
33) 柴垣勇夫『朝日遺跡群第１次調査報告』　愛知県教育委員会　1975
34) 伴　信夫「長野県下伊那郡南信濃村尾ノ島館遺跡発掘調査報告」　長野県考古学会誌17　1974
35) 神村　透「飯田市寺所遺跡とその他の遺跡」　長野県考古学会誌　1967
36) 大沢和夫「信濃阿島出土の弥生式土器」　考古学９－10　1938
37)『長野県史　考古資料篇　主要遺跡（中信）』　1983
38) 紅村　弘『牧野小山遺跡』　美濃加茂市教育委員会　1973
39) 相模湾西部では甕形土器が条痕調整を持ち、殆ど東海地方の土器群と言ってもいい程であるので対象からはずした。
近藤英夫・望月幹夫「平塚市王子台遺跡の調査」『第４回神奈川県遺跡調査・研究発表会要旨』　1980
明石　新『神奈川県平塚市王子台遺跡発掘調査報告書』　平塚市博物館　1986
40) 杉原荘介・他「東京都（新島）田原における縄文・弥生時代の遺跡」考古学集刊３－３　1967
41) 杉原荘介「下総新田山遺跡調査概報」　人類学雑誌58－７　1943

（千葉県文化財センター調査部）